特集 **学生参加のまちづくり**

学生が地域に溶け込んでさまざまな取り組みをする「域学連携」について紹介します。

大正大学専務理事 柏木正博氏 × 中津川市長 青山節児

問 市民協働課（☎内線327）

市内のお祭りや地域の行事などで、大学生の皆さんが活動している様子を見たことはありませんか。それは「域学連携」で活動する大学生の皆さんです。域学連携は大学生や大学教員の皆さんが地域に溶け込み、住民と一緒になって、地域の課題解決や地域づくりに取り組む活動のことです。学生ならではの感性や行動力、大学教員の知識や経験を生かすことで、地域の活性化を目指しています。また、学生たちは地域の中での、さまざまな人たちとの関わりや取り組みを通じて次の世代を担う社会人として貴重な体験を得ることとなります。

中津川市では、24年前に加子母地区で山村の暮らしを体感しながら林業と木造建築を学ぶ「加子母木匠塾（かしのきしょうじゅく）」として始まったのが、域学連携の興（おこ）りです。市ではこの域学連携を市内各地に広げ、現在（平成29年度）では年間18もの大学から延べ6千人を越える学生がこの域学連携に参加しています。

その中で大正大学の1年生8人が昨年9月から10月、付知地区で約40日間という長い間滞在し、まさに地域に溶け込んで域学連携の活動に取り組みました。学生の皆さんは、いったん大学に戻り、地域課題を研究し、2年後（3年次）に再び付知地区を訪れ、さらに質の高い取り組みをする予定です。今回は、大正大学専務理事の柏木正博さん（以下理事）ら大正大学関係者が学生が地域の皆さんにお世話になったお礼にと中津川市を表敬訪問され、青山市長（以下市長）と域学連携について意見を交わしていただきました。

―大学生の皆さんが地域で活動され、どのような成果がありましたか

理事 地域の人たちは本当に学生に良くしてくれました。学生にとっては、今回の実習では地域の方との関わり方について実践を通じて教えていただいたことが、大きな成果です。この経験は学生の次の行動に大きく変化を生み出しています。

市長 今回は付知地区で地元の企業や北商工会、まちづくり協議会などとともに地域課題に対して取り組んでいただきました。地域もまた、学生たちと一緒に考えることができ、若い感性と外から見た地域を知る良い機会となりました。

―域学連携を取り組んでいくうえで大切なことは何でしょうか

理事 学生は経済学の学習として取り組んでいますが、考えるばかりではなく、行動することを大切にしています。「行動する経済学」と呼んでいますが、社会で求められているのは、自ら行動することだと思っています。

市長 今回も40日間という長い期間の受け入れで当初は心配もありましたが、地域の方々がしっかり受け入れをしてくださり、学生たちも自分たちの活動に手応えを感じることができたのではないでしょうか。地元がどれだけ学生たちのために協力できるというのが重要だと思っています。地域の協力なしではできません。

理事 そうですね。地域の受け入れの力が強いと学生が地域にお返しする力も強くなります。今回も本当に学生たちは地域を好きになったようです。昨年加子母地区で実習を行なった学生は、今年中津川市の東京発信所として、中津川市の魅力発信も行いました。

域学連携に関わっていただいた浦崎先生（左）、佐藤先生（右）、山中先生（右から2番目）（12月25日中津川市役所にて）

―今後の域学連携の展望は

理事 中津川市全体が大学のサブキャンパスになると良いと思っています。大正大学のある巣鴨地区では大学のキャンパスの一部として商店街の入口に「大正大学東門」という看板を設置することで調整しています。大学を巣鴨の住民のものとして開放し、保育園児が散歩するなど地域に開かれた大学になっています。中津川市全体がサブキャンパスになれば、学生も安心して中津川市に来ることができると思います。

市長 中津川市はリニアが開業すると、東京とは1時間足らずの時間距離で結ばれることとなります。中津川市が学生にとって身近で魅力のあるまちになればと願っています。

中津川市は古くから街道の宿場町として人や文化が交流する土地でした。今後も学生の交流するまちとして、また現代版宿場町としての役目を果たしていく意味でも域学連携には力を入れていきます。今後ともご協力をお願いします。

大正大学山中先生へのインタビュー

域学連携で学生と一緒に付知地区で活動していただいた大正大学の山中先生（以下先生）にお話を伺いました。

―域学連携の活動をしている地域創生学部はどんな目的で創設されたのですか

先生 地域経済の発展に貢献できる人材の育成を目的としています。特に自分で動ける人材を育成するため、座学だけでなく、実習に力を入れているのが特徴です。

―付知地区ではどのような活動をされたのですか

先生 地域資源を生かした「シゴトづくり」をプロジェクトとして地域と一緒になって行い、人やお金、モノを動かす仕組みを学び、新たな提案をすることができました。まず、中津川市全体を知り、付知の人たちと交わることで付知地区について知ることから始めました。協力していただく各事業者へのインターンでは自らアポを取るなど学生自ら行動・体験をすることを重要視しました。それだけではなく、地域に溶け込んで地域の清掃活動などにも積極的に取り組みました。

―実習を終えて学生の皆さんに変化はありましたか

先生 東京に戻って間もないうちに、付知に「行きたい」ではなく「帰りたい」と言っていたのには驚きました。

今後は地域とともに汗を流し、一緒に頑張れる人材になってくれるのを楽しみにしています。

①御菓子屋での実習：付知のおいしいものを多くの人に知ってもらうためのビジネスプランを考案②ブルーベリー農園での実習の様子：農園事業者の作業効率向上やPRにつながるビジネスプランを考案③キャンプ場での実習の様子：付知の豊かな自然を生かした心も体も元気になるツアーのビジネスプランを考案④中学生との交流会：地元の中学生とも交流⑤バーベキューパーティー：地元商工会の方たちがバーベキューパーティーを開催。心もお腹も満腹に⑥報告会：最後は実習の成果を報告。多くの人が集まった地域の報告会では、学生だけでなく、活動に関わっていただいた地元事業者の方も一緒に報告に参加。

大学生を受け入れた付知地区の方の想い

受け入れ支援をしていただいた付知町まちづくり協議会の曽我さんは

「初めは都会の学生8人が40日間滞在すると聞き、私たちも期待とともに不安も多くありました。皆さんにはボランティア清掃や郷土料理作り、国有林ツアーなどの活動に参加いただきました。その中で、学生なりに地域に溶け込もうとする姿や、地域を知るために積極的に交流する姿がとても印象的でした。

私たちよりも、付知の事を調べ知り、今後について考えてくれた姿が本当に嬉しかったのと同時に、私たちも学生たちのような想いを故郷へ持たないといけないと教えられたように感じます。

純粋で真っすぐで可愛くて、みんな本当にわが子同然になっていました。2年後、どんな姿を見せてくれるのか本当に楽しみです。今から待ち遠しくて仕方ありません！」

と大学生の皆さんのこれからの成長に大きな期待を寄せていました。